

— Introduction —

第一部 「社会病理学」の概観と発展 1

前編 社会病理学の本質 5

一 社会病理学の定義 5

— Introduction —

第二編 社会病理学の発展 15

一 社会病理学の発展 15

— Introduction —

第三編 社会病理学の課題 25

一 社会病理学の課題 25

— Introduction —

第四編 社会病理学の展望 35

一 社会病理学の展望 35

— Introduction —

第五編 社会病理学の結論 45

一 社会病理学の結論 45

第一部

社会病理学の反省と課題

社会病理学の概観と発展

社会病理学は、社会の病態を研究する学問である。社会の病態とは、社会の正常な機能を失った状態を指す。社会病理学は、社会の病態の原因を明らかにし、その治療法を探究することを目的とする。社会病理学は、社会学、心理学、医学、法学など、さまざまな学問と密接な関係にある。社会病理学は、社会の病態を研究する学問である。社会の病態とは、社会の正常な機能を失った状態を指す。社会病理学は、社会の病態の原因を明らかにし、その治療法を探究することを目的とする。社会病理学は、社会学、心理学、医学、法学など、さまざまな学問と密接な関係にある。

I 社会病理学の歴史と転回

一、ブルジョア社会と社会問題

わが国の社会科学は本質的に輸入品であり、その用語のほとんどは翻訳語でしかない。この事情は「社会病理学」(social pathology)の場合もまったく同じであり、その学問的性格からいえば、社会心理学とともに、アメリカン・サイエンスの一つとしてわが国に移植されたものである。ただし、さらにその源をさかのぼると、この語の原産地はヨーロッパであることがわかる。もちろんそれは、医学の畑で古くから使われていた「病理学」という名称を借りたもので、病理学=pathologiaの語源はギリシャ語のパトス(παθος)「苦痛・受難・悲哀」に由来する。つまり、「社会病理」とは一つの比喩であり、「社会病理学」は、人体と社会のアナロジーを前提とする「社会病」の研究にはかならなかった。このような発想は、明らかに、社会問題の存在と社会有機体説(social organism)の成立を前提とし、一九世紀末に生まれたものである。

じっさい、「社会病理学」と題する最初の書物は、一八九六年にフランスで公刊されたが、

重要なのはそれを生み出した「世紀末(fin de siècle)」という背景である。一九世紀は資本主義がヨーロッパに確立し発展をとげた時代であった。しかし、それはまた、資本主義がそのあらゆる矛盾を露呈し始めた時代でもあった。イギリスでは一八世紀の六〇年代頃に産業革命が始まり、スミスの「国富論」(一七七六)は、「見えざる手」による「予定調和」を説くことができた。しかし、機械生産が発展し大都市への人口集中が進んでゆく反面では、新しく生まれた賃金奴隷たちの悲惨が表面化してきた。イーデンの貧困調査が着手され(一七九五)、マルサスの「人口論」(一七九八)はすでに暗い現実の影を映しているが、一九世紀初頭には年少労働者の保護立法が余儀なくされ、三〇年代に入って産業革命が終結すると同時に、この「世界の工場」にはスラム(slum)が根をおろし、「社会問題(the social problem)」がはつきりと自覚され始める。救貧法の改正(一八三四)がこの時期の象徴的な出来事であった。デューケンズが「オリヴァ・トワイスト」(一八三九)の中で描いたのも、この頃のロンドンの下層社会であった。そして、三六〇七年、四一〇二年に発生した工業恐慌をへて、ようやく労働者の階級的連帯が芽生えてくる。カーライルはすでに「チャーティズム」(一八三九)を著わしていたが、四〇年代に入ってチャーティスト運動はさらに高揚する。「イギリスにおける労働者階級の状態」(一八四四)の中で、青年エンゲルスは、この時代の労働者の窮乏と悲惨を、情熱をこめてしかも綿密に描いたのであった。大陸では、資本主義はまだイギリスほど発展していない。しかしフランスでは、ナポレオン戦争一敗北―王政復古(一八一五)―革命〔七月王政(一八三〇)〕という激動と混乱の季節が続き、王党派と共和派の政争が錯綜する他方で階級対立も根をおろし始めていた。こうした状況において、サン・シモンは「産業体系」(一八

(二二)を著わし、コントは社会的秩序の混乱を精神の問題としてとらえ、「実証哲学講義」(一八三〇〜四一)に没頭した。イギリスでチャーティスト運動が退潮した一八四八年に、フランスでは二月革命が起こり、また「共産党宣言」が現われて、「一個の怪物」―共産主義の「徘徊」を告げる。

ヨーロッパの三〇―四〇年代は、このように社会問題が成立し、やがて社会運動が発展し始める時代であった。だがその間にも資本主義生産はますます発展をとげ、ブルジョアジーは支配を確立していく。フランスでも七月王政から第二共和制にかけて産業革命が進み、五〇〜六〇年代には金融資本が膨脹し、さらに植民地経営に乗り出して行く。しかしそれと同時に、貧富の差はますます拡大し、上層では腐敗と倦怠が、底辺では窮乏と自棄が、ブルジョア社会の醜悪な面貌をあらわにする。しかもそこには、三〇年代になかった憂うつな沈んだ気分がつけ加わった。このような現実の法則的論理を説明しようとする試みが、マルクスの「経済学批判」(一八五九)・「資本論」(第一巻、一八六七)となつて現われたのである。すでにこのときブルジョア社会の矛盾は根底的に批判され、その崩壊が予言されたのであった。この時代の雰囲気は、多感な芸術家たちの作品にもさまざまな形で投影された。一方では倦怠と焦燥があり、逃避と耽溺が選ばれる。ボードレールは「悪の華」(一八五七)をうたい、「さだかならぬ怖れ」を幻想のきらめきと「人工楽園」の中で忘れようとした。他方では現実の克明な解剖が冷ややかなメスを使って行なわれる。バルザックの「人間喜劇」は、七月王政下の貴族・成金・小市民たちを描いたが、もはや六〇年代に入ると、ユゴーでさえ「みじめな人たち(レ・ミゼラブル)」(一八六二)に眼を向け、自然主義者ゾラは第二帝政下のパリ下層社会

を舞台として、「ルーゴン・マッカール叢書」を企てた。「ああ、貧乏人の窮死、飢えを叫ぶ空腹、歯をががつがつさせ、どんなに穢ないものもつめこもうとする獣のような怨念が、けんらんと輝きわたる大パリに見られようとは！」――この言葉は、花の都の偽れる盛装をよく伝えている。

しかし、ヨーロッパ資本主義がその矛盾をさらに深刻に露呈するのは、七〇年代以降である。社会問題はここで多様化しつつ広汎化し、しかも同時に慢性化するに至る。すべてはそれ以前に用意されていたが、ただこの時期に入つて一時にどつと芽を吹くのである。とりわけ普仏戦争で敗れたフランスでは、パリ・コミューン(一八七一)が血なまぐさい弾圧によつて挫折したあとに一八七三年の恐慌におそわれ、八〇年代から九〇年代を経て二〇世紀初頭に至る間に独占資本の成立が準備され、帝国主義国家としての地歩が築かれる反面で、収賄議員(chéquier)が横行し、政界のスキャンダルが頻発し、失業者が、寄せては返す恐慌の波ごとに街頭に投げ出され、裏街に沈没していった。そして党派間の争いは絶えなかった。他方、普仏戦争に勝つて成金熱の生まれたドイツは急速に生産を発展させ、社会主義鎮圧法(一八七八)を制定する一方、植民協会(一八八二)を設立して、若い帝国主義国家としての野望にもえていた。しかしイギリスでは、フランスのような複雑な政情はないにせよ、一八七三年以降の長期不況に見舞われ、さらに反復する恐慌のたびに失業率の上昇は深刻さを加え、スラムの住宅問題が王立委員会によつて調査されるほど、暗い影を投げかけていた。ロンドンの貧民窟の住民を指す East-Enders という言葉や、失業(unemployment)という概念が成立したのも八〇年代のことなのである。

国によっていくらか事情は異なるにせよ、この時代のヨーロッパは、もはや輝かしい未来を信ずることができなくなっていた。ヨーロッパのどの大都市にもスラムの貧民たちの不潔な密住生活があり、失業現象はますます大規模となり、犯罪が増大して犯罪者の一部は職業化して寄生し、自殺率も全体として上昇してくる。汚職と買収がさかんに行なわれ、投機と賭博に熱中する者が現われる。大都市の夜の街角には娼婦たちがたむろし、アルコールや阿片に耽溺して憂さを忘れようとする中毒患者や、精神障害者が、いずれもふえた。知識人たちの間では「世紀末」が論じられ、「黄昏の国」(Das Abendland)が自覚される。そしてフランスではランボーのような破滅型ボヘミアンが、イギリスではワイルドのような逆説好きのダンディが現われ、他方では、俗流唯物論とまた神秘主義も生まれた。「頹廢 (décadence)」という言葉が現われたのは八〇年代であったが、ここでは「ある生命の進展過程の終り、文明崩壊に直面しているという意識」が、耽美的快楽主義と結びついていたのである。ノルダウはこうした世紀末の気分の中に、一つの「退化 (Entartung)」(一八九五)を見た。

当然のことながら、このような社会問題の多様化と深刻化、広汎化と慢性化は、それらにたいする研究や調査への関心と努力を呼び起こした。七〇〜九〇年代にかけて、ロムブローゾの「犯罪人」(一八七六)、フェッリの「犯罪社会学」(一八八〇)、タルドの「犯罪」(一八九六)、デュルケームの「自殺」(一八五七)、シュトレームベルクの「売春」(一八九八)などのほか、いくつものモノグラフが現われた。イギリスでは、ブースが一八八六年から行なった貧困者調査の結果を「ロンドン民衆の労働と生活」(一八八二〜七)として刊行し、一八九九年にはラウントリーが貧困研究に着手した。「社会病理学」という書物が、ドイツ系ロシ

ア人たるバウル・フォン・リエンフェルト(当時の国際社会学研究所副所長、のち所長)によって著わされたのも、実は、これまで述べたような時代の社会的背景においてであった。もっともリエンフェルトが社会病理学の始祖であるとしても、それはコントが「社会学」の名付親であるのと同じ程度のことにはすぎない。今日の社会学なり社会病理学なりは、それらの始祖たちのものとはかなり内容を異にするからである。だが、いずれにしても、リエンフェルトの社会病理学が、その「時代」の刻印をとどめていることこそ、われわれにとっては重要なのである。

二、社会病理学の萌芽形態

リエンフェルトにとって、社会病理学は「社会的有機体 (organisme social)」の進化の過程で現われる「社会的異常 (anomalie sociale)」についての帰納的研究であり、社会学の重要な一部門として位置づけられているが、社会的異常は経済・法律・政治の三領域で、さまざまな形態をとって現われるとされる。たとえば、その例としては次のようなものがあげられている。

(A) 経済領域の異常⇨経済的停滞、予測の欠如、乱費、貯蓄心・計画性・発明精神の不足、不用品の増大、富の不平等、流通の不全。

(B) 法律領域の異常⇨正義に対する無感覚、他者の権利の軽視、不公平で買収される裁判官、公的私的な安全を保障するのに無力な法廷、矛盾する法律の無秩序な集積、大衆の要求と

文化水準にそぐわない民法・刑法の制定、動産・不動産・金融取引・商工業に対する無保障。

(C) 政治領域の異常Ⅱ内乱、閣僚の交替、政府の顛覆、無力な中央政權、国家予算の不足、過重な租税、公債支払いの停止。

こうした現象は、すべて一九世紀末のヨーロッパに見られたものであり、その意味で、それらの研究の必要を説いたリリエンフェルトはたしかに時代の子であった。彼にとつて、こうした現象は、「進歩的進化法則」が実現すべき正常な状態からの「偏倚 (deviation)」であり、「社会病 (maladie sociale)」にはかならないと思われた。つまり、社会病理学は一つの「社会診断」として生まれたわけであり、社会学者による時代批判・文明批評として現われたのであった。もちろん、コントの「社会学」も、一つの時代批判ではあった。だが、彼は社会的混乱と無秩序を「精神」に帰せしめたにすぎず、厳密な意味での「社会」の診断ではなかった。

また、ユダヤ系ハンガリー人のマックス・ノルダウは、精神医学と生物学の諸概念を用いて社会の「退化」を論じ、主として文学作品を素材としつつ「世紀末的気分」の診断を行なったが、これもまた、社会的メカニズムの分析をとまわなかった。これに対してリリエンフェルトは、「社会的有機体Ⅱ社会体 (corps social)」のトータルな構造の認識を前提として、社会的異常Ⅱ「社会病」の発現過程を科学的・体系的に追究し、「社会臨床学 (thérapeutique sociale)」と「社会的医術 (art médical social)」の必要を説こうと試みたのである。

この限りでリリエンフェルトの実践的情熱と科学的関心は貴重なものであった。しかし、彼の社会理論はきわめて特異でしかも単純であり、たとえば、彼よりかなり早く政治経済学 (po-

「*Psychologie*」をメスとして「近代ブルジョア社会の解剖」を行なったマルクスに比べて、あまりにも大きなへだたりがあった。リリエンフェルトにとって「社会有機体」は、単なる説明の便宜的手段として用いられる一つの比喻どころではない。社会は、真に有機体なのであり、自然的有機体と社会的有機体の間には、低級と高級の違いがあるにすぎず、また要素的単位たる細胞の独立性と自由において、程度の差があるにすぎない。この二つの次元のいずれに属する有機体も、根本的には同じ一つの「進化法則」に支配されており、それにしたがって、個々の有機体は増殖・発生・成長・老衰・死滅の過程を経るのである。リリエンフェルトは、社会 (的有機) 体の要素的単位を「細胞個人 (cellules-individus)」と呼び、社会体の解剖学的要素を二つに分け、第一次的なものとして、細胞個人の相互的な「社会的反射行為 (action réflexe sociale)」から成る「社会的神経組織 (système nerveux social)」を、第二次的なものとして、細胞個人の養分として生産・交換・消費するべき「財 (richesse)」から成る「社会的細胞間物質 (substance intercellulaire sociale)」を区別する。社会病は、要するにこれらに生ずる異常Ⅱ「病理的狀態」にはかならない。前者の「病理症狀」は、一時的または決定的な「退化と無活動」をひき起こすような、一ないし多数の神経細胞の「病的な過剰興奮 (surexcitation morbide)」であり、戦争、革命、狂信などはそのもつとも端的なあらわれとされる。これに対して後者の病理症狀は、肉体的・心理的な諸力の「減弱と衰退」をひき起こす「有害物」や、無益無害で「単純な快感」をもたらすだけの「無用物」の「不つり合いな増加 (croissance disproportionnée)」に認められ、その例として、アルコール、阿片、奢侈品、不道徳な書籍などの氾らんがあげられる。これら二種の症状が、社会的有機体の生理・形

態・統体としての経済・法律・政治の三領域のそれぞれで発現したものが、さきに列挙された諸現象なのである。しかし、こうした多様な社会病―社会病理現象についてのリリエンフェルトの病因論 (étiologie) は、きわめて単純である。彼によれば、「あらゆる社会病は、個人の退化 (dégénérescence) または異常な行為 (action anormale) にその源をもつ」のであり、病理的状态は、不適切な活動や過剰興奮または活力の喪失が、個人または集団によって引き起こされることから生ずるのである。こうした個人の異常は「心身的 (psychophysique)」な過程であり、また、社会的・相互的な作用を及ぼすものである。その場合、しばしば、社会的細胞間物質としての文学芸術作品その他によって媒介・伝播されることがあるし、「細菌」ともいふべき、外来または内部の違法的または合法的な「社会的寄生者 (parasite social)」――たとえば、植民者、犯罪者、搾取者などによっても、社会病が発生し伝染することが多い。ところでこうした社会病の治療のための処方箋を書く段になって、リリエンフェルトは自己の宗教的立場を明らかにするのである。社会的有機体の正常な状態と進歩的進化は、細胞個人相互の行為の交換が「共同体の物質的・道徳的な諸力の均衡 (équilibre)」を保ちつつ行なわれることによって可能となるのだが、近代社会にみられる「知性と意志と良心の均衡喪失 (déséquilibre)」は、結局のところ「科学と宗教の乖離」によって生じたのだと彼は考える。したがって救済のためには、キリスト教信仰と原罪の自覚にもとづいた「知性と道徳の融即」こそ必要であり、社会学者と政治家はそれに貢献し、社会病の治療につくさねばならない、というのである。

シア語の書物を著わした後、ドイツ語の大著「将来の社会科学にかんする考察」(五巻、一八七三―一八八一)においてすでに明らかにされていた。よく知られているように、一九世紀前半は自然科学的知性への信頼が急激に高揚する時期であり、また自然科学の急速な発展が、社会現象の研究に大きなインパクトを与え始めた時期であった。ドルトンの「化学哲学の新体系」(一八〇八)、ラマルクの「動物哲学」(一八〇九)、ラブラースの「蓋然性の哲学」(一八一四)、サン・ティレールの「解剖哲学」(一八一八)、ライエルの「地質学原理」(一八三〇)などは、一九世紀初頭のもっとも輝かしい成果であった。しかし、この世紀における自然科学の発展過程の中でもっともめざましい新たな展開が見られたのは、中期とくに五〇～六〇年代の生物学と医学の領域においてであった。すでにラマルクの進化論はコントにも影響を与えており、また、二〇年代における顕微鏡の改良を経て、植物細胞はシュライデン(一八三八)、動物細胞はシュヴァン(一八三九)によって詳細に観察されていたが、四〇年代におけるフォークトやモレシヨットの生理学の研究や、唯物論への影響が強まる時期を経て、五〇年代に入って、フィルヒョウの「細胞病理学」(一八五八)、ダーウィンの「種の起源」(一八五九)という画期的な書物が公刊された。さらに六〇年代には、バスターールの実験(一八六三)、ベルナルの「実験医学序説」(一八六五)、メンデルの遺伝法則の発表(一八六五)、ヘッケルの「一般形態学」(一八六六)などが相次いだ。これらのうちもっとも広汎な影響を及ぼしたのはもちろんダーウィンであり、彼の進化論と淘汰説にインパクトを受けて、スペンサー、バジヨットの社会ダーウィニズムが、七〇年代に現われたのである。シエッフレルの「社会体の組成と生活」(四巻、一八七五～八)や、すでにふれたリリエンフェルト

トの「考察」、エスピナスの「動物の社会」(一八七七)など、代表的な有機体論者の書物が開始されたのも、また遺伝への深い関心をともなったゾラの小説や、ロンブローゾの犯罪者研究が発表されたのも、すべてこの七〇年代においてであった。この時期に至って、自然と社会と生物と人間を統一的にとらえようとする野心的な試みが、単純かつ大胆なアナロジーにもとづく社会的有機体の理論となって極端にまで達する。この動きが、リエンフェルトと親交の深かったウォルムスの「社会的有機体」(一八九六)、ノヴィコフの「社会の有機的理論」(一八九九)などにつながるのである。

リエンフェルトの社会有機体説は、このような文脈ではじめて理解されるべきものである。彼の進化論は、スペンサーのそれと類似しており、スペンサーの「生物学原理」(一八六四〜七)にふれている。しかし、彼の「社会病理学」にもっとも大きな刺激を与えたのは、明らかに医学者フィルヒョウの画期的な細胞病理学説であった。フィルヒョウは、病気の原因が個々の細胞にあり、組織内での病的細胞の形式によって伝播するということを、医学史上初めて指摘したのであった。しかも、彼は当時の社会と政治に強い関心を抱いて、むしろ人体を社会になぞらえて説明した。彼の細胞説の特色は、自律的な生命体としての細胞の相互的依存を強調したところにあり、人体を各細胞が市民にあたるような一つの国家になぞらえ、病気を、病める細胞市民による一揆・内乱として説明した。このような最新の病理学説が、青年リエンフェルトの興味をそそったのは当然であった。彼は、誰よりも大胆に、シェッフレやウォルムスよりもはるかに徹底して、こうした医学上の新学説を自己の社会研究に適用したわけであり、しかもその際に、フィルヒョウ以後の成果——たとえば、コッホのコレラ病原菌の発見

(一八八〇)——などから得たヒントをも利用したのである。また「寄生」や「退化」についてはウォルムスも論じており、おそらく、レイランケスターの「退化」(一八九〇)、ダモールほかの「生物学と社会学における退縮による進化」(一八九四)、ファンデルヴェルデの「生物のおよび社会的寄生」(一八九五)などの諸研究によって、直接または間接に影響を受けたのであろう。世紀末の現実を、すでに述べたように「進歩」の信念を裏切るような事象をあまりにも多く露呈していたし、ダーウィンの学説の中には、寄生虫や退化した生物もやはり進化の産物であるということの指摘はあったのであり、こうした研究がさかんになったわけである。

さてこのように分析してみると、リエンフェルトの社会病理学なるものは、要するにヨーロッパ資本主義が独占段階に移行し始めた時期に、深化せる矛盾の反映としての社会問題の多様化・広汎化を、生物学的・病理学的アナロジーにもとづいて認識しようとした独特な形態のブルジョア・イデオロギーといえよう。それはとにかく、人間の行為と社会の構造をつらぬく自然的法則を統一的に把握しようとしたものであり、また資本と労働の対立にふれ、搾取と寄生をモラリズム的に批判してはいる。しかし、結局資本主義の体制的な矛盾を認識することができず、むしろ「社会病」の原因を「病める細胞個人」に帰せしめ、宗教と道徳とエリートによる改良に「治療」を期待したにすぎなかった。それは、生物学と形而上学の奇妙な接合に基礎をおき、また、すでに一八九四年にレーニンが「人民の友とは何か」の中で批判していた「主観主義的」社会学の弊におちいっており、体制認識を欠いた改良主義にとどまったのである。

三、アメリカ社会病理学の開花

こうした欠陥にもかかわらず、当時の社会的現実——とくにその経済的矛盾と政治的混乱——に対するリリエンフェルトの説い関心は、貴重なものであった。しかし結局のところ、彼ら社会病理学はヨーロッパの地で実を結ばず、仇花となって空しく散り果てたのである。フランスではその後、実証的なデュルケム学派の「社会学主義 (Sociologisme)」が主流を占めたが、彼らにとって、思弁的な「生物学主義」はナンセンスであったし、ドイツに抬頭したテニス、ジメルラをはじめとする形式社会学派は、歴史的現実から身を遠ざけた。そしてその後のヨーロッパ社会学は、講壇における市民権との引きかえに社会問題への関心を自ら捨て去り、これとの対決を経済学や社会政策学に委ねたが、やがては社会科学自体が、二〇世紀三〇年代以後のファシズム専制のもとで、あるいは退嬰しあるいは圧殺されたのである。

だが「社会病理学」は死に絶えたわけではなかった。それは、新世紀の二〇〜三〇年代になつて、すでに完全に独占資本主義の段階に到達していたアメリカにしっかりと根をおろして、色とりどりの花を咲かせたのであった。こうした社会病理学の新たな開花は、アメリカ資本主義のもたらした社会問題という腐蝕土があつて、はじめて可能となつたのである。一七世紀以来、ピルグリム・ファーザーズの子孫にとって牧歌的理想郷となつてきた「新大陸」は、一七七六年の独立を経て、一八世紀末から一九世紀初頭にかけて始まるフロンティア開拓を続けながら、ナポレオン戦争の頃から産業革命期に入り、一八三〇年代の「ジャクソニアン・デモク

ラシー」のもとで北部の産業資本と南部のプランテーションを確立してゆき、さらに四〇年代末に現出した「ゴールド・ラッシュ」を飛躍台として、繁栄への上り坂を急テンポで歩んでいくようにみえた。若きアメリカには発展のみがあり、悩みはなにもないようであった。しかしその反面、社会問題も、ひそかにしかし着実に根をおろし始めていたのである。すでに三〇年代から流入し始めた北欧移民の一部は、ニューヨークの港に近い共同住宅 (tenement-house) に沈没してスラムの芽となり、一八三四年には「貧民条件改善協会 (AICP)」が慈善的有識者によって設立されざるをえなかつたし、一八三七年には早くも最初の恐慌が起きていた。

そしてさらに五〇年代に尖鋭化した南北の対立が、北部の産業資本の勝利に終わった南北戦争終結の直後あたりから、社会問題にはわかに広汎化し多様化し始めるのである。この六〇〜七〇年代の時期には、まだ「西漸運動」は続いており、鉱山と油田が開発され、鉄道網が四方に伸びて行き、工業生産はますます拡大した。それはいみじくもトウエインが名づけたように「金ピカ時代 (The Gilded-Age)」(一八七三)の到来であった。そしてその過程の進行とともに、八〇年代にかけてますます資本の集中・蓄積が進行し、独占体が徐々に形成され、カーネギー、ロックフェラー、モルガンらに代表される富豪・財閥が基礎を確立していった。しかし同時に、南北戦争の終結以後に始まるこの時代は、「合衆国史上もっとも腐敗に満ちた、もっとも暗い時代」となり、「ヒロイズムとスキャンダル、犠牲と貪欲とのあの混沌たる無秩序」の時代ともなつたのであった。奴隷解放直後の南部における政治的混乱と、そこで暗躍した「政治家山師 (carpet-baggers)」「や「便乗家 (scalawags)」は、七〇年代後半には姿を消したが、一方では、とりわけ八〇年代に、荒々しい「泥棒貴族 (robber-barons)」「や投機師ども

が、農民の土地を収奪し、官吏を買収し、猟官 (office-hunting) に耽りながら巨富を積み、成金のしあがった。他方、南部の農園では、ニグロがシェアー・クロッパー制のもとで新しい隷属状態におかれたのみならず、クー・クルックス・クラン (一八六五) やジム・クロウ法 (一八八二) に象徴される貧しい白人の差別・迫害の始まりにおびえていたし、北部の大都市の底辺には、東南ヨーロッパから新しく大量にやってきたスラヴ・ラテン系の貧しく無知な移民の群れがどっと流れ込んだ。恐慌は一八七三年にもやってきたが、皮肉にも、シカゴで世界博覧会が開催された一八九三年にふたたび農村と都市をおそい、失業者を街頭に投げ出した。まさに、それはジョージのいう「進歩と貧困」 (一八七九) の時代であった。九〇年代にはフロンティアは消滅し、代りに都市の暗黒が生まれ、また労資の階級対立が尖鋭化し、すでに A F L (一八八一) の結成をみていた労働運動が激化して、ブルマン鉄道の大ストライキは二千の陸軍によって鎮圧されねばならなかった。しかもその間に、泥棒男爵たちは反トラスト法 (一八九〇) もストライキも無視して、ウェブレンが批判した「有閑階級」 (一八九九) への道をひたすら踏みしだいて進んだのであった。

このような時代は、心あるインテリゲンチヤの間に、社会問題への関心呼び起こさずにはいなかった。そこで八〇年代から二〇世紀の初頭にかけて、文学とジャーナリズムの領域では、アダムの憂うつな諷刺やベラミの文明批評的ユートピア小説は別としても、ガーランドの「役得」 (一八九二) から、ノリス、ロンドン、シンクレア、ドライザ、アンダソンへと連なるアメリカ的リアリズムが発展し、「真実主義 (Veritism)」から「暴露文学 (muck-raking)」へと展開するのである。また、すでにクレイプシー、ホワイト、ストロンダらによって始めら

れていた都市底辺の貧困者への注意の喚起は、アダムズ女史のハル・ハウス設立 (一八八九) に発展し、またデンマーク生れの新聞記者リーイスの精力的なキャンペーンによっていっせう高められた。⑧ こうして展開された「革新主義 (progressivism)」は、「金権政治の象徴たるマッキンレー大統領の暗殺に続いて登場するシオドア・ルーズベルトの時代に最高頂に達し、タフトを経てウィルソンへと引き継がれるのである。

アメリカの社会学が根をおろしはぐくまれたのも、実は、こうした時代であった。社会科学協会は一八六五年に設立されていたが、シカゴ学派の祖となったスモールが「社会学雑誌 (A J S)」を創刊したのは一八九五年であり、ウォードを初代会長としてアメリカ社会学会が発足したのは一九〇五年のことであった。一八七〇年代には、フィスタやサムナーを通じて、スペンサーをはじめグンプロヴィッチ、ラッツェンホーフアーらが輸入され、進化論や淘汰説が影響を及ぼしていたが、アメリカ社会学の創始者たちは、時代を反映して社会問題に強い関心をもたざるをえなかった。リレンフェルトの「社会病理学」が公刊される二年前に、すでにスモールとヴィンセントは「社会研究入門」 (一八九四) の中で、「社会病理学」という一章を設けて、「個人的・集合的生活の維持と進歩的向上」を妨げるような「明らかに異常または不健全な構造と機能」の研究をその課題として定めている。⑨ またコロンビア学派の祖となったギッディングズは、「社会学原理」 (一八九六) の中で、自殺、発狂、犯罪、悪徳などに示される「墮落」の現状を概観しつつ、「絢爛の只中における惨状」を嘆き、苦悩は「進歩の代価」であると断じた。同様にウォードも、「応用社会学」 (一九〇六) の中で社会の「退化」現象への注意を強調した。さらにそれらに続いては、クリーリーが「社会組織」 (一九〇九) の中で

「社会的解体 (social disorganization)」という概念を提起して、のちの解体論の先駆をなし、同じ年にジョージが、さらに一九一九年にエルウッドが、それぞれ異なった角度からではあるが「社会問題」という同名の書物を著わしている。だが、この時代には、「社会病理学」の体系的理論は現われるに至らず、リースの「他の半分はいかに生活しているか」(一九〇〇)、ウィルコックスの「離婚問題」(一九〇二)、リースの「貧民の子弟たち」(一九〇三)、ゴウルドの「労働者の住居」(一九〇五)、ウッズの「大都市の貧民」(一九〇五)、**「都会の荒野」**(一九〇八)、リースの「スラムとの戦い」(一九〇二)、ハンターの「貧困」(一九〇四)、リヒテンバーガーの「離婚」(一九〇九)などの特殊研究あるいはルポルタージュが生み出されたにとどまった。

この時期には、まだアメリカ社会学の実証主義的研究方法は確立されておらず、もちろん理論的枠組は明確に形成されてはいなかった。しかし一九世紀末から二〇世紀の一〇年代にかけての、こうした進歩的・批判的知識人の写真―暴露的伝統のうえに立って新しい調査技術を用いたすぐれた特殊研究が、第一次大戦後から二〇―三〇年代にかけて続々と現われるに至るのである。国内で「革新主義」が高揚している間に、すでに独占段階に達していたアメリカ資本主義は、米西戦争の勝利(一九〇八)を契機として海外への帝国主義的進出を始めていたが、第一次大戦の終結後は国内の経済はますます上向きとなり、「株の高さは天までも」といわれるほどの空前の繁栄を誇り始めた。アメリカは今や巨額な債権をもち、外国貿易は一九二二―八年の間に八五―一三〇億ドルに急増し、金融資本の中心たるウォール街は活況を呈した。明らかに、若きアメリカは「世界のアメリカ」となり、世界資本主義の新しきリーダーとし

て、ヨーロッパに取ってかわったのである。新産業 (New Industries) が急速に発展し、自動車、ラジオ、電気器具、人絹、化学製品が、「モダン・タイムズ」の大量生産方式によって、市民の手許におびただしく、また迅速に届けられた。映画も新しい娯楽となって大衆の心と眼を吸いつけ始めた。こうした物質文明の驚異的な繁栄は、敬けんなビルグリム・ファージャーの子孫たちを、ビュリタニズムから快樂主義に改宗させてしまった。そこへ、戦争の悲惨な体験と記憶に苦しみ、シニクとなった復員青年たちが加わる。しかも資本主義のもとの繁栄は、娯楽と射倖の不用産業を繁栄させる。そこで人びとは、「ジャズ・エイジ」の享樂に熱狂し、酔い痴れたのであった。しかし「アスピリン・エイジ」とも呼ばれるこの「狂乱の二〇年代 (The Roaring Twenties)」に、社会問題が消えてなくなったわけではなかったのである。むしろ、社会問題は多様化し、前世紀から持ち越されたままの「貧困」と「差別」のうえに、「犯罪」と「背徳」と「頹廢」がつけ加わり、いっそう複雑な性格をもつようになった。戦時中から昂進していたナシヨナリズムは排外主義に転化して、流入しはじめた左翼思想もまた嫌悪され、サツコーヴァンゼッティが処刑され、ニグロの差別が秘密結社の手で激しく煽られたし、移民を制限する法律が一九二二、二四の両年に制定された。シイヴィニストたちは「百パーセント・アメリカン」を要求して、労働運動や国際連盟や産児制限にまで反対し、暴力を振りさえた。他方不用産業の成長と禁酒法(一九一九)反対の気分は犯罪者の寄生を容易にし、下層移民への差別も加わって、イタリア人を中心とする「犯罪企業 (crime-business)」の帝国が、「夜の大統領」たるカポネの君臨のもとでふくらんでいった。ギャングと警官は白昼街頭で機関銃さえ射ち合い、官吏の買収は日常茶飯の事となった。フロイドが俗流化され、

セックスも商品化され、婦人はショート・スカートの流行に敏感となり、ペッティング・パーティがはやり、離婚と遺棄はふえた。

どの面からみてもこの「二〇年代」は「狂乱」の時代であった。ルイスの「バビット」(一九二二)のような大勢順応的な俗物にとつては適していたが、「アロースミス」(一九二五)のような真実一路のインテリゲンチヤには不快な拜金主義が支配しており、ドライサーの「アメリカの悲劇」(一九二五)を生きるグリフィスや、フィツジェラルドの「偉大なるギャツピー」(一九二五)のように、成功への梯子をよじのぼろうとする野心的な若者にとつても、酷薄非情なジャングルであった。こうした時代の雰囲気の中で、ハード・ボイルドとなった「失われた世代」の青年たちは、「ジャズ時代の桂冠詩人」フィツジェラルドのように、放埒な享楽に焦燥感をいやそうとするか、ヘミングウェイのように、「国籍離脱者」となつてヨーロッパに脱出し、そこでもまた失望した。ただし、この時代の社会問題が風俗問題に還元されるわけではなく、貧困は決して解決されなかった。当時の統計は、「多数の人びとにとつては、世界で一番金持ちの国の一番繁栄の年でさえ、豊かな暮しをすることなんかとてもできなかった」という事実を示していたのである。この繁栄の時代にも暗い片隅はあった。

それをこそ、社会学者は敏感に把握せねばならなかった。そして実際、当時のアメリカ社会学は、前世紀九〇年代から二〇世紀初頭にかけて抬頭したリアリズム精神と革新主義のエートスに支えられつつ、社会問題に対する鋭い関心を示して、多様な実証的モノグラフを生み出した。大戦中にも、たとえばヒリーの「個人犯罪者」(一九一五)やリッチモンドの「社会診断」(一九一七)などがあつたが、二〇年代に入るとにわかに活気をおびる。ギリン「貧困と

扶助」、デイツァインの「悲慘とその原因」(一九二二)、アングラスン「無宿労働者」、トーマス「不適応少女」(一九二三)、サザラランド「犯罪学」(一九二四)、ギリン「犯罪学と刑事学」(一九二六)、モウラー「家族解体」、スラッシュャー「ギャング」(一九二七)、ワース「ユダヤ人街」、タウンロー「スラム問題」、キャヴァン「自殺」、ヒラー「ストライキ」(一九二八)、モウラー「家族不調和」、ゾーパー「ゴールドコーストとスラム」、シヨウ「非行地域」(一九二九)などは、その理論的枠組が同じではないとしても、実質上、社会学への貢献といえよう。ベインとコーヘンの指摘によれば、社会学のマスター論文のテーマのうち社会学関係は、一九二〇年には第三位、二四年には二位を占め、学位論文の中で比率は同じ期間に一〇%へと倍増した。これらの諸研究は、ようやく基礎を確立しつつあつた社会事業に対してデータを提供し、また社会学の一般理論のみならず、都市、階層、家族などの研究に対しても貴重な素材を提供した。

しかもアメリカ社会の動きは、こうした二〇年代の成果が三〇年代に引き継がれ、整理・体系化されることを可能にした。というのも、一九二九年を境に、アメリカ資本主義は空前の繁栄から空前の大不況へとドラスティックに暗転して、社会問題がにわかには深刻化し巨大化したからである。恐慌は突然おそいかかり、おそるべき混乱をもたらした。銀行はつぎつぎに破産し、生産水準は一九三二年までの三年間に半減した。一九二五年には、アメリカの繁栄が二千万台にのぼる自動車の数に象徴されていたが、一九三三年には、千四百万人にのぼる失業が記録された。かくてフランクリン・ルーズベルトとそのブレイン・トラストの「ニュー・ディール」が始まり、住宅政策や失業救済などが推進されるのだが、今や社会学は、二〇年代ま

での資料の蓄積にもとづいて国家的施策への貢献が期待され、実務家たちに必要な知識とみなされるに至ったのである。「社会問題」や「社会病理学」と題する入門書・概説書が続々と現われたのはこの時期であった。その先駆は、すでに二〇年代のタウン「社会問題」(一九二二)、マンクイン「社会病理学」(一九二五)、デクスター「社会的適応」(一九二七)などにみられるが、ここでは社会の制度に対する個人の「不適応(maladjustment)」という捉え方が強く、また概念的装備も貧弱であった。しかし、不況時代の三〇年代に入ると、否応なしに社会的環境そのものが問われざるをえなくなり、社会的変動過程とのかかわり合いの中で社会問題が捉えられようとする。その場合には、オグバーンの「社会変動論」(一九二二)に代表されるような、一〇〜二〇年代に関心の高まったアメリカの変動理論が大きな影響力をもった。この時期の概説書としては、マンガールド、フェルプス、ギリン、エリオット・メリル、ジレット・レイナード、クイン・ポードン・ヘイファー・ハーバー、ブレイナード・ゼンニ、オーダム、フォード、ローゼンキスト、四〇年代に入って、クイン・グリューナ、モウラー、ブラウンなどのものがある。これらの中には幾つかの立場があるが、もっとも有力となったのは、エリオット・メリルに代表され、モウラー、ブラウン、さらに第二次大戦後のフエアリス、ブロックにつながる「社会的解体(social disorganization)」論の系譜である。もちろん、その中でも細かい差異はあるが、もっともスタンダードなものとして今日まで版を重ねて来たエリオット・メリルの場合、解体とは「社会的相互作用や集団の有効的機能の秩序立った過程」が「崩壊(break down)」する現象とされる。それは「諸力の均衡」に「変動」が生じることによるのだが、「動的社会」としての近代社会では、「地位と役割の一般的不明確

性」がその構造自体にあり、成員に対する期待と役割実現の間の「不一致」や、社会的諸価値の相互的な「葛藤」をまぬがれない。組織化と解体は同一の社会体系の対立的側面にすぎず、いずれもダイナミックな社会的変動にもなる必然的過程である。エリオット・メリルは、こういう枠組にもとづいて、個人、家族、地域社会、国際社会の各レベルの解体現象を統一的に説明しようと試みつつ、アルコトル中毒から革命と戦争に至るまで包括的に論じようとする。しかしここでは、リリエンフェルトらにみられたような有機体説はナンセンスとして退けられ、「社会病理学」という名称すら、その「生物学的な意味合い」ゆえに避けられている。

四、現代社会病理学の反省と展望

このようにして二〇〜三〇年代に開花したアメリカの社会病理学は、調査技術の発展を背景とした実証的資料と、文化遅滞論や構造機能理論および社会心理学に多くを負っている。それは、ともかくも広汎多岐に亘る問題現象の体系的統一理論の構築を目指しつつ、市民権を確立しようとした。ところがまさにその時に、とりわけ三〇年代末から四〇年代初頭にかけて、それに対する批判も、アメリカ社会学の内部で生まれていたのである。社会学一般に対する反省は、すでに一九三九年にリンドが「何のための知識か」を問うた時に行なわれていたが、とくにアメリカ社会病理学者のイデオロギーに対しては、一九四三年に若き日のミルズの論述の中に、注目すべき見解がある。ミルズは三人にのぼる社会病理学者のテキストを組上りにのせて、かなり徹底的な批判を行ない、そこに(一)構造的視点の欠落、(二)多因論的な相対主義、(三)事

実の断片的収集、四抽象化の不徹底、(5)擬似客観的な表現、(6)現状適応的な非政治性、を見いだした。そして出身と経歴を調べたのちに、地方中小都市の中間層に特有なモラリズムと改良主義が、村落的「秩序」への執着と規範への「同調」の鼓吹をもたらしているとして断じた。解体論であれそれ以外の立場であれ、全体としてのアメリカ社会病理学に共通の欠点をミルズは大胆に指摘している。しかし、アメリカ社会病理学のもっとも根本的な欠陥は、一九世紀以来の伝統的社会学一般にも通ずるものであり、なによりまず全体社会の体制的・階級的な構造の把握を欠き、社会問題を資本主義の矛盾の反映として捉えないというところにある。そこでは、社会問題は社会の近代化にともなう社会的分化の必然的随伴物として宿命論的にとらえられ、実践的提言としては、せいぜい部分的・漸進的改良と、個人の矯正と適応が志向されるにすぎない。そこには社会の弁証法的発展の認識も、体制変革のヴィジョンもまったく見られないのである。こうした特質は、ブルジョア・イデオロギー一般に共通するものではあるが、アメリカ社会学の場合には、細部においてさらにアメリカの社会的構造と思想的風土による規定がつけ加わるのである。たしかに二〇〜三〇年代に確立したアメリカ社会病理学には、一種の「崩壊」感覚と社会的激動の苦悩の痕跡が認められる。だが、それは自らを資本主義の矛盾の産物として自覚することができなかった。もちろん、ヨーロッパ一九世紀末の有機体説的社会病理学よりは複雑な概念的図式をもち、はるかに実証的であり、その限りで一つの学問的進歩を示してはいる。にもかかわらず、それが多くを負う構造機能理論は、その論理的構造において有機体説とよく似ており、またその非弁証法的な変動過程論は、現代化された一種の進化論ともいえるのである。

四〇年代初頭には、一方で社会病理学が市民権を確立し始めると同時に、他方でそれに対する批判の芽も現われたのだが、世界大戦はこの種の研究を頓挫せしめ、むしろ戦争目的に直接役立つ応用部門を発達せしめた。グループ・ダイナミクスやコミュニケーションの研究の発展は、こうした戦時科学の成果に属する。戦後のアメリカ社会学界では、これらの社会心理学的研究の摂取にもとづく構造機能理論の新たな展開が五〇年代を中心としてみられたが、社会病理学の分野ではフェアリスの「社会解体」(一九四八)、レマートの「社会病理学」、ブロックの「解体」(一九五二)、クリナードの「逸脱行動の社会学」(一九五八)など以外には、社会問題のテキスト類や非行・犯罪の大量のモノグラフがあるが、理論上の新たな飛躍はみられない。しいていえば、戦後の新たな動きとしては、レマート、クリナードを中心とする偏倚(逸脱)行動(deviant behavior)論や、マートンらによる「アノミー」や「逆機能(dys-function)」の概念の導入があげられよう。戦後世界資本主義のチャンピオンとなったアメリカでは、国内の社会問題よりはむしろ国際問題への関心が優位に立った感があり、またアメリカン・アイデオロジーの新たな高揚と、資本主義の全般的危機のもとでの国家―独占の結合の深化は、統制を強調し、逸脱を抑止しようとする問題意識を強め、構造機能理論や偏倚行動論の優勢を支えているようにもみえる。

だが、いっそう注意すべきは、第二次大戦後アメリカ資本主義が世界支配を目指し、「新植民地主義」を推し進める過程で、その「従属的同盟国」として密接な関係を結んだ日本に、アメリカ社会病理学が直輸入されたということである。その導入はとくに五〇年代に入って行なわれ始め、戦前の大正期に根をおろしていた社会問題の研究との連続性を欠いた「社会病理

学」が、そのイデオロギー的性格も自覚されないまま、日本に根づいたのである。磯村英一の『社会病理学』（一九五四）や、同時に出た戸田貞三・土井正徳編の同名の書物は、まだきわめて錯然たる印象を与えるものであったとしても、精力的な調査にもとづく大橋薫の『都市の下層社会』（一九六二）や『都市の社会病理』（改訂版一九六五）は、アメリカ理論の日本の現実への適用として、それなりに一つの体系化を試みたものといえよう。他方、ここ約一〇年間に、非行・犯罪・離婚・自殺・未解放部落・スラムなどについての実証的モノグラフがかなり蓄積されており、整理を必要とする段階に至っている。こうした特殊研究の中で世界的業績としてひとときわ光彩を放っているのが、岩井弘融のユニークな大著『病理集団の構造』（一九六三）である。

しかし、こうした日本の社会病理学の展開過程における新しい理論的動向の一つは、アメリカ的社会病理学への懐疑と不信の深まりであろう。それはすでに、社会解体論を初めて紹介した竹中勝男や雀部猛利などによっても表明されていたのだが、六〇年代に入って、内外の政治・経済的情勢の進展にインパクトを受けつつ、日本社会学界内部におけるマルクス主義の抬頭に応じてますます明確化されてきた。一九六五年に至って、仲村祥一は「体制病理学」を積極的に主張し、真田是はその近著「現代社会学と社会問題」で、アメリカ社会病理学のきびしい批判を行なっている。日本の社会病理学は、ここに重要な転機を迎えたといっている。それが現代日本の社会問題と真に対決するためには、従来の体制没却的な粹組と断片的な事実の羅列と表面的な現象記述とを捨て去り、現代日本の資本主義のもとでの国民大衆の生活破壊と生活不安を、多面的に生き生きと分析することが必要であろう。そのときはじめて、社会病理学は

体制変革に独自の貢献を果たすのである。

① 「社会病理学史」などというジャンルは、いままでのところない。ここでは紙数の制約上、個々の学説の詳細な解説と批判はあきらめて、むしろ巨視的バースペクティブのもとで一種の「社会史的」学史を試みることにする。

② 「社会問題」の概念規定や歴史的展開過程については、ここでは立ち入れないから、次のものを参照されたい。

真田是編「社会問題の理論」講座『現代日本の社会問題』第一巻、汐文社。

③ ハウザー『芸術の歴史』高橋義孝訳、平凡社、昭和三四年、第3巻、一〇三五頁。

④ Paul v. Lilienfeld: *La Pathologie Sociale*, V. Giard & E. Briere, 1896.

リレンフェルトの詳しい紹介をはじめ、社会病理学諸理論のやや包括的な解説と検討の試みは、誤りをふくんだ不十分なものがら次のものにある。拙稿「社会病理学の現実と可能」社会問題研究、一一巻四号、昭和三七年三月。

⑤ M. Nordau: *Degeneration* (English Translation, Heinemann, 1895).

⑥ メイスン『科学の歴史』矢島祐利訳、岩波書店、昭和三三年、下巻、四八八頁。

⑦ カニユ『アメリカ史』中屋健一訳、白水社、昭和三八年、五四頁。

⑧ R. Lubove: *The Progressives and the Slums*, Univ. of Pittsburgh Press, 1962.

⑨ A. W. Small & G. E. Vincent: *An Introduction to the Study of Society*, American Book Company, 1894, pp. 267~304.

⑩ ヒューバーマン『アメリカ人民の歴史』小林良正・雪山慶正訳、岩波書店、昭和四〇年、下巻、一

四五頁。

- ① 大道安次郎『アメリカ社会学の源流』三一書房、昭和三年、一五〇頁。
- ② C. W. Mills; The Professional Ideology of Social Pathologists, A. J. S., Sept., 1943.
- ③ 竹中勝男「社会崩壊の研究における問題」人文学、昭和二十六年。
- ④ 雀部猛利「我国における社会崩壊現象」ソシオロジ、3号、昭和二十八年。
- ⑤ 仲村祥一「社会病理学の現代的課題」仏教大学研究紀要、四八号、昭和四〇年九月。
- ⑥ 社会学者を中心とする社会問題との対決の新しい試みとして、次のものが参考にならう。
- 講座『現代日本の社会問題』全四巻、汐文社、

〔大橋薫・大藪寿一編「社会病理学」(昭和41年・誠信書房)所収の

第一章第二節「社会病理学の歴史」を転載〕

Ⅱ 社会病理学の対象

— 新しき胎動の素描 —

その内容はさておき、とにかく、「社会病理学」という新しいジャンルが、日本のアカデミ
 ーの片隅に席を得つつあることは、もはや一つの既成事実である。その席が、たとえ陽当りが
 わるい場所にあり、ときたま冷ややかな一べつを向けられるにすぎないとしても、幾人かの先
 達にとっては、感慨もひとしおのことであろう。だが、それと同時に、まさにこの幼児期から
 少年期への脱皮にあたって、学問的要請と社会的現実が、社会病理学の性格規定をあらためて
 強いるのである。そして実際、この領域の内部で、いくつかの胎動が始まっている兆候はアメ
 リカでさえかすかに認められ、日本ではいっそう著しいのである。

こうした曲り角にさしかかって、われわれは、社会病理学の課題と対象をめぐる根本的な問
 題を再検討しなければならないが、その場合、まず第一のアポリーアは、「学」としての成立
 可能性の問題として現われる。この問題に対して「否」と答える者は、しばしば、「社会(的)
 病理(学)」という名称に、古き「有機体説」の痕跡を認め、また「病理」概念への価値判断
 の混入とその主観的恣意性を非難するのである。しかし(ここでは、有機体説とその現代的諸
 形態の吟味と評価はさておき)、「社会病理学」の歴史的起源が有機体説に根ざしていたこと
 は事実としても、そのことが、今後とも、両者の結合を絶対的・必然的たらしめるわけではな